

人類進化学と順老順死について

順老順死の会会長 高野信夫

ヒトが登場する時点から現代に至って、更にヒトの未来についての進化学的考察と未来の医学について考察します。

○脊椎動物の進化の法則

脊椎動物の進化には二つの法則があります。1、魚類→両生類→ハ虫類→哺乳類→ヒトへの流れには必ずドンドン成長して新たな形質を獲得する成形進化の時代に続いて、獲得した形質を整理・統合する幼形進化の時代が必要なのです。そしてまた成形進化→幼形進化→成形進化——と連綿と続いて来たのです。片一方だけの進化ではありません。2、進化の究極の目的は母なる海から育って、外部環境からの完全独立を達成する事です。決して短時間に適応しているから——と云う無目的な方向ではなく、大きな歴史的時間の中で独立進化を達成する方向に進化して来たのです。独立進化を達成させる進化の方法は明らかに幼形進化が主体です。現代の進化学者や医師を含めた生物学者には、ダーウィンのみと云う、白人だけが世界だと云う狭い考えが支配しているので、簡単な事実の積み重ねが捉えられなかったのでしょうか。

要約すると、脊椎動物の進化は成形進化と幼形進化を繰り返しながら独立進化を達成する方向にあり、ヒトの出現によってほぼ完成しつつあります。その、もう一步が大切で、その大切な時期に今は差しかかっている事を肝に銘じるべきです。

成形進化とはドンドン生長して新たな形質を獲得する時期で、ダーウィンの適応と云う考え方よりも、ラマルクの用不用の説で、獲得形質は遺伝すると云う考え方です。それも個体の進化ではなく、今西錦司の種全体の進化と云う考え方の方が適切でしょう。幼形進化とは力を溜める時期で、子供 or 胎児の形態のままで生長を緩めて大人になり、成形進化で獲得した新たな形質を整理・統合して、必要なものならば胚発生 of 早期に取り込んでしまう進化の方法です。形態的には大きくなって複雑化し、生理的には機能の増大を意味します。ヒトに当てはめればボルクの胎児化仮説（1926年フライブルク解剖学会の講演）なのですが、皮膚の色による人種の起源に関してはこの仮説は全くの間違いです。白人の進化的優位性をくすぐる説（=ヒトは胎児の形態の儘オトナになる→胎児の形態に近い人種が一番進化している→胎児の皮膚の色は白いから胎児の皮膚の色に近い白人が一番進化していると云う説）でしたから、発表された途端に

全ての領域の白人から大歓迎を受けたのです。しかし、ダーウィン（適応と云う考え方では、太陽に適応しているのは黒人であって、白人は太陽に適応していないので一番遅れている事になってしまう）を否定しているだけに、現在では全く消されてしまって、タブーにさえなっているのです。

○霊長類からヒトが誕生する過程を考えてみましょう。

ヒトは、1、直立二足歩行をし、2、道具を作り、3、思考し、4、言語を用いる 5、裸のサルと云う5つの特徴を持っています @’。

@’ もう一つの特徴として、上を向いて寝る習慣を挙げる必要があるでしょう。歴史的に見て、一体ヒトはいつごろから上を向いて寝る様になったのでしょうか？エジプトのナイル河の西から 5000 年以上も前の黒人の埋葬された遺体が出土しますが、これらは必ず土器の壺と一緒に、膝を曲げて丁寧に腹這いに埋葬されています。直立二足歩行を始めたばかりのヒトは歩行していない時には現代のヒトと同じく坐っていたらうし、寝る時にも坐ったままだったかも知れません。精々が膝を軽く曲げてたれかかって寝ていたのでしょう。時代が下がってファラオのミイラは仮面を被って正装させて、儀式として足を伸ばして上を向いています。上野の科学博物館には、28,000 年前からのスニール遺跡から 10 才くらいの子供が二体マンモスの骨に囲まれて、マンモスの骨のビーズで正装されて、上を向いた姿で出土している例が展示されています。その説明では、子供に莫大な富が与えられていた？or 身分の違いに加えて権力の相続があった？となっています。旧人=ネンデルタール人で狩猟採集生活をしていたので、平等主義の生活だった筈なのに、面白い架空の解釈をしているのです。架空の解釈なら、人身御供の儀式的埋葬だと述べた方が当たっている様に思います。私には無理矢理上を向かせた埋葬の仕方の様に思えるからです。若者二人と一緒に埋葬されると云うのも不自然ですし、本来なら二人を並べて埋葬するでしょうが、この二人は頭をくっつけて反対方向に一直線に並べられて埋葬されているのです。もっと調べてみる必要があります。一つ、私がアフリカを歩いていた頃の経験です。野宿で夜を過ごさねばならなかった時には、現地のヒトは焚き火を囲んで、火を守りながら坐ったままでした。火の方を頭にして腹を上にして寝ていたのは、寝袋を使用していた私とアメリカ人だけでした。明け方は寒くて、膝を抱えて丸くなっていました。明るくなって、近くに手掌大の豹？の足跡を見つけてゾットした経験があります。→上を向いて寝る習慣は安全の確保と寒さ対策が完了してからでしょう。

これらの特徴を獲得したからには、ヒトは脊椎動物の仲間ですから、当然 脊

脊椎動物の進化の法則が適用されます。しかし現代の科学者は進化的な見方でヒトを研究していないので、霊長類からヒトが進化する過程で、これらの特徴の内の直立二足歩行だけを先ず獲得したと勝手な解釈をしています（猿人）。その証拠こそ 350 万年前のラエトリの足跡であり、ルーシーの骨格（1974 年 40% 出土）だと云うのです @”。次いで、解放した手で道具を作り、それが脳を刺激して頭も大きくなり、思考する様になった。そして言語を用い出してから、最後に裸になったと云う順序を考えています。しかしこの順序は、脊椎動物の進化の法則に当てはまらず、とても無理な考え方なのです。

@” 上野の科学博物館にはラエトリの足跡の模型（奇妙な事に、立てて展示してある）と、出土した骨格を基に直立した、まばらに毛の生えたルーシーの姿が展示されています。皮膚の色にも注意して下さい。本当かな？と思いながら自分の目で考えてみて欲しいです。

○脊椎動物の進化の法則に則って考えてみましょう。

霊長類からヒト（新人）が登場するのに、先ず幼形進化を進めます。子供の形態のまま or 胎児の形態のままで大人になりますから、頭はキャシャで丸く大きくなります。中味の脳も大きくなるので思考する様になり、道具も作ります。そして胎児の皮膚の様に体毛も薄くなって裸になるのです。これらは一連の動きで全身に及んでいます。この幼形進化を充分に進めて返り点から成形進化に入って、グイッと背骨をもたげて、無理なコウ角を作って直立二足歩行を獲得するのです。

更に咽頭を広くして言語を用いる様になった。勿論この経過中に新しい道具の開発もすさまじい勢いであったのでしょう。この様に霊長類が幼形進化を充分に進めてから成形進化に移って、直立二足歩行と言語を獲得してヒトになったのです。成形進化を進めながら皮膚だけは幼形進化を進めて裸になると云う事は不可能です。こうして新人である、私達のヒトが登場したのです。

この新たに獲得した直立二足歩行と言語は成形進化によって獲得したばかりで、それから幼形進化を進めては来ているのですが、未だ十分に整理・統合されていません。だから不完全なままに私達を今でも苦しめているのです。成人から中高年にかけて一番多い疾患が腰痛や膝の病気です。また日本人同士でも意思の疎通が上手くいかない場合が多いし、外国語となるとお手上げです。西原先生の云う口呼吸の問題もあります。

○始めて登場したヒトの皮膚の色

さて始めて誕生したヒトの皮膚の色は何色をしていたのでしょうか？

アフリカで誕生して、アフリカで育った頭の大きい裸の姿で、直立二足歩行

と言語を獲得してヒトになったのです。だから厳しい太陽に順応した黒い皮膚をしたヒト(=黒人)が誕生したのです。始めて登場したヒトはアフリカ生まれで、黒人だったのです!!

人類学の本を読むと、誰でも分かるこの事実が、何故か、煙幕を張られた状態でハッキリとは述べられていないのです。だから幾ら本を読んでも良く理解できないのが実情です。白人の学者達が隠している内容を見つけ出すにはかなりの時間が必要でした。そのキッカケを与えてくれたのが、一つにはコンゴ川の畔のキッサンガニと云う町での黒人の白子との遭遇でした @”。

@” 黒人の白子は一見して黒人の白子だと分かりました。髪もチリヂリで顔つきも黒人のそれだったからです。髪のチリヂリはメラニン色素がないだけに、2-3代もすると細くて素直な髪になるでしょう。また顔つきは、戦後の日本人の顔つきがドンドン変わっている様に、肉食と云う生活環境の変化によって変わると考えています。出土した頭骨だけからでは、同じヒトの骨なので、皮膚の色までは分かりません。

そして二つ目は、ライフ ネーチャ ライブラリーの『原始人』の本の中の、裸にしたヒトの歴史の図からの発見だったのです。現代人の代表として白人を裸にして一番前を歩かせているのですが、現代人には裸の人はいません。生物の一つとしてヒトを描いているのだから裸にした事は理解できていたのですが、何かが奇怪しいのです。何回も見ていて、やっと気がついたのです。せっかく裸にしたのに、床屋に行っているー。裸にしたのなら髪もヒゲもボウボウになっているのが普通でしょう。単なるミスか、故意のミスなのか?→この程度の仕方で煙幕を張っていると云う事に気がついたのです。この絵の姿が私には煙幕を張っていると示してくれる合図になったし、逆に煙幕を解くキーにもなったのです。この事に気がついてからは、白人学者が隠している事実を次々と発見する事ができるようになったのです。⇒ヒトの誕生、経過、発展の歴史を書いている本の著者達全員が『白人の起源は黒人の白子である』と知っていて、それが分からない様に煙幕を上手に張っている事にも気がつく羽目になりました。

○白人と黄色人の登場

白人や黄色人はどの様にして登場したのでしょうか?

現代でもそうですが、世界中のヒトは2万人に一人の割りで白子が誕生してきます。詰まり100人に一人の割りで劣勢遺伝子を持っている勘定になります。白子は金髪、碧眼、白い皮膚、おまけにソバカスまであるのです。アフリカからレバント地方へ進出して来た黒いヒト達は本来ならヒトの流れに乗ってインドの方へ向かったのですが、白子を家族に持っているヒトは敢えてヨーロ

ッパへ向かったと思えるのです。レバントで、ヨーロッパは気候的に太陽も薄く、白子には良い環境だと云う情報を得たのではないのでしょうか？親の身になって考えてみると、白子は黒人から疎外されてヨーロッパへ追いやられたのではなく、親が白子に住みやすいヨーロッパへ連れて行ったと考えています。

ヨーロッパで肉食をしながら、白子から白人に進化したのです。白子はメラニン色素を全く作れませんので、メラニンが0です。黒人は100のメラニンを作れるとすると、0の白子が1でも作れる様になると白人になるのです。100と0との間の子は100です。100と1の間の子は中間の50が誕生するのです。この50こそが黄色人です。

ヨーロッパとレバントの間で生まれた黄色人はどちらからも疎外されて中央アジアへ活路を見いだして生活したのでしょう。気候的变化があつて、中央アジアは乾燥化が起こって、東アジアまで逃げて来た訳です。中央アジアから東へ平地を辿ると黄河の流域に入ってしまう。次から次へと入って来る難民に対して、ここにはもう既に定着している難民がいると云う合図で作った簡単な壁の連なりが万里の長城の始まりだったと考えています。この黄色人の流れは太平洋にぶつかって北と南に進み、既に揚子江の流域まで達していたインドからの流れの民を毛散らかしたのです。更に日本列島にも及んで、既にインド回りで住み着いていたヒト達を北と南に分断したのでしょう。このヒトの流れは私が世界中を放浪して来た経験から考察した内容です。

ヒトは新たに獲得した直立二足歩行と言語の整理・統合（欠点の修正）の為にドンドン幼形進化を進めていましたが、白子はメラニンを獲得する為に成形進化を進めざるを得なかった。間の子の黄色人は50のメラニンを持っているので、そのまま幼形進化を進める事ができたのです。だから皮膚の色による人種の進化は黒人が一番先頭で、次いで黄色人、そして白人と云う順になっています。勿論その差は微々たるもので、同じヒトなのです。

○ヒトの進化における未来像

さて、このまま幼形進化を進めて行くとヒトはどうなるのでしょうか？

西暦2500年頃には返り点に到着して独立進化を完成させるでしょう。そうすれば、直立二足歩行の欠点は、医学的には未だ解決の目途さえ立っていませんが、自然はプログラム通りに解決させているでしょう。言語に関しては、お互いに目を見つめながら握手して「心」で会話すれば、今使っているパソコンの様に、瞬時にお互いの意志が通じ合える仕組みを完成させているでしょう。

更に、現代では超能力として一部の人のみに存在している能力を全てのヒトが持っていて、遠隔透視、未来の予知、サイコメトリー、死後半年間くらいの霊とのコンタクトも、程度の差はあれ、可能になっているでしょう。そうすれ

ば政治家の嘘は誰でも見分けられるし、教育や終末医療・葬式のあり方も変わるでしょう。社会生活全てが良い方に変わらざるを得ないでしょう。

問題は、ヒトが独立進化を達成する為には少なくとも 500 年かかるのに、現代医学は 100 年もすると不老不死の医学を完成させてしまう事です。もう死ななくてすむと云う医学の完成です。どんな医学なのか？考えてみて下さい。ヒトが現在の状態（=独立進化の完成の一步手前）で不老不死の医学を手に入れたらどうなるか？権力者だけが独占して永遠の支配を続けるでしょうし、私達一般人はコンピューターによって酷い奴隷状態に置かれてしまう一。

不老不死の医学はヒトが幼形進化を進めて独立進化を完成させる頃に達成して欲しいと思っています。そうすれば理想とする社会で、理想的な生活を送れる筈だからです。理想とする社会での理想的な生活とはどう云う生活なのでしょう？これも皆さんに考えて欲しい問題です。

社会運動家を含めて全ての社会学者から、全ての宗教までが同じ理想をかかげていると思います。易しい言葉で表現すると、皆さんが健康で、足るを知って、平和な社会で生活する事と纏められるでしょう。如何ですか？そうすれば永遠の生命を持つ神となって生活できるのです。

現在の状態では、順老順死の医学を率先するのが一番良いと思っています。順老順死の医学とは、1、健康な生活を送りながら順調に老いて、2、寿命が来たら倒れて、3、一週間くらい家族に看取られながら、4、死を自覚して（受け入れて）、5、順調に枯れ木の様に死ぬ。これを達成させるのが順老順死の会の主旨です。

○未来の医学

未来の医学である、不老不死の医学と順老順死の医学に係わる肝心の気エネルギー（=気 E と書きます）とは何か？

脊椎動物の進化に必要なエネルギーを追求していて、魚類が登場する時に作り出した第一次副腎皮質ホルモン（糖質コルチコイド）と、次の両生類が登場した時に新たに別個に作り出した第二次副腎皮質ホルモン（糖質コルチコイドと鉱質コルチコイド）までは見つけていたのですが、それ以降 第三次副腎皮質ホルモンは登場していないのです @”。その代わりに見つけたのが大地に存在しているエネルギー（大地エネルギーで、大地 E と書きます）でした。

@” 魚類の中でも硬骨魚はほぼ同じ第一次副腎皮質ホルモンとして纏められるのですが、軟骨魚の副腎皮質ホルモンは種類によっていろいろあって、一つに纏める事ができませんでした。軟骨魚→硬骨魚→両生類となるのだから一と一と考えて、軟骨魚を切って捨ててしまったのでした。当時どの本を参考にしていたのか、資料がありません。

大地 E は地球規模での時間の経過と共に増加しています。そればかりではなく脊椎動物が進化するに従って体内に沢山持つ様になっているのです。現在のヒトが一番沢山持っていて、計測すると平均で+12~+13 あります。そして大地には+6 もあるのです。この数値は一定の容積の中に含まれるディスクの量だと考えています @'''。そのディスクを形作っている極微粒子は物質を構成しない微粒子なので質量が無いし、電磁気も無いのです。現在の物理学者が探している素粒子は全て物質を構成している微粒子なので質量がありますが、物質を構成しない微粒子が存在するのです。昔々光が波動だとすると、真空中にもエーテル粒子が存在する？として探したエーテル粒子こそ物質を構成しない微粒子だと考えています。微粒子には全て質量があると云う前提で実験、観測したから発見できなかったのです (マケルソン、モーリーの実験)。

@''' 私が勝手に名づけた大地 E や気 E については、同じ考えで見つけて利用している人が多くいる筈です。皆さんが同じエネルギーを捉えているのか？違うエネルギーなのか？ データを突き合わせて確かめる必要があります。更にその数値となると、一定の容積を幾らと定めているのか？確実な定義が必要になります。お互いに共通の定義に則って議論を進めないと国際性が得られないでしょう。この領域における、急務の課題です。

その微粒子が5つクシ団子状に連なって、そのクシ団子が12本平面にディスク状に並んでいる構造物が大地 E であり、生物の体内に存在している気 E の本体です。この微粒子がそれぞれ0 or 1の性質を持っているので、一本のクシ団子は2の5乗=32通りの意味=記憶を持てます。→1枚のディスクでは32の12乗通りの記憶を持てるのです。

新しく体内に取り込まれた気 E は体内にある記憶を持ったディスクからコピーされるので、同じ記憶を持つディスクが大量に蓄積されています。人体には神経回路による記憶 (ハードディスク) と、もう一つこの気 E による記憶 (フロッピーディスク) があるのです。然も、この気 E の記憶は神経回路に取り出す事も出来ます。私のボケはこの気 E を充満させて元へ戻ったのだし、更に生命力をアップさせて、脳の神経回路を1年半かけて年齢相応にまで治してくれたのです。

この記憶を持った気 E を死ぬ前に採集して、保管しておいて、試験管の中で育てたクローン人間が誕生する前に注入すれば、記憶を持つクローン人間が誕生します。これが不老不死の医学で、釈迦の誕生は正にこの方法です。

そして、この気 E を身体内に充満させておけば生命力がアップするので、健康を維持できるし、何よりもボケません。と云うよりも年齢に応じて順調に記憶力が低下していきませんが、決して認知症にはなりません。それでも病気はします。寿命でない病気なら、軽く早く治ります。これが順老順死の医学です。

そして大地 E が現在は+6 ですが、西暦 2500 年頃には+15 にまで高くなるのです。そうすると身体内の気 E は誰でも+20 まで持つ事が可能になります。更に-20 の気 E が5%くらい混じって来て、所謂超能力を持てる様になるのです。現在のテレビに出て来る超能力者は皆さん+20 を持っていて、マイナスの気 E は精々が-13~-15 を少しだけ持った人たちです。大地 E が少ないのに、これだけ高い気 E を持つと、多くの超能力者は健康的に何処か障害を持つ様になってしまいます。要注意です。

私のこの理論が正しければ、気 E を高めて行って、-20 の気 E を少量だけ混ぜれば、超能力者になれる筈なのです。と云う訳で、自分の身体を使って実験を開始してみたのです。目的はユングの SYNCHRONISITY を実体験すると共にスエーデンボルクの霊界も同時に感得できる筈——と云うものです。ユング岳の頂上に登頂した時に同時にスエーデンボルク岳の頂上にも立てる——。異なった二つの山の頂上を同時に登頂する方法があるのです。これこそがユングの云うシンクロニシティだったのです。

今回の講演の日時までこの実験を成功させておいて、私の理論は正しかったと証明して話しを展開したかったのですが、残念ながら、今回は未だ成功していません。ユングの自伝を読み返してみて、ユングは超能力者だった事が良く理解できたので、私も近々超能力を実現できるところまで来ていると感じています。

参考文献など

- 黒人→白人→黄色人、高野信夫著、三一書房、1977 年
- 特集—胎児の生命記憶、ドルメン 2、人類学・民俗=民族学・考古学季刊誌 ヴィジュアル フォークロア発行、1990 年 2 月。ボルクの講演内容が全訳（田隅本生訳）されて載っている。
- 改稿—進化論、徳田御稔著、岩波全書、1974 年
- ヨーガと副腎皮質ホルモン、高野信夫著、三一書房、1980 年
- 原始人、ライフ ネーチャア ライブラリー、昭 41 年
- 0 才児がことばを獲得するとき、正高信雄著、中公新書、1993 年
- 歯はヒトの魂である、西原克成著、青灯社、2005 年
- はだかの起源、島泰三著、木楽舎、2004 年
- ユングは知っていた、コンノケンイチ著、徳間書店、1998 年
- 宇宙の根っこにつながる人びと、天外伺朗著、サンマーク出版、1999 年
- 白人とは何か？、藤川隆男編、刀水書房、2005 年
- 上野の科学博物館は楽しく、面白いので参考になります。特に脊椎動物の最後のヒトの部屋は——。